教育委員会協議会 会議録

平成 30 年度第５回教育委員会協議会
場所：四万十町地域交流センターくぼかわ（四万十町役場東庁舎）多目的大ホール

（１）開会及び閉会に関する事項

開会 平成 30 年７月 13 日（金）18：30
閉会 平成 30 年７月 13 日（金）19：56

（２）教育委員会出席者及び欠席者の氏名

出席委員	教育長	伊藤 博明
	教育委員	平田 健一
	教育委員	竹島 晶代
	教育委員	八田 章光
	教育委員	木村 祐二
	教育委員	中橋 紅美

（３）高知県教育委員会会議規則第８条、第９条の規定によって出席した者の氏名

高知県教育委員会事務局	教育次長（総括）	岡村 昭一
〃	教育次長	高岸 憲二
〃	教育次長	長岡 幹泰
〃	教育政策課課長	酒井 啓至
〃	高等学校課課長	竹﨑 実
〃	高等学校課企画監（再編振興室長）	山岡 正文
〃	高等学校課課長補佐	藤田 優子
〃	高等学校課再編振興担当チーフ	池上 淑子
〃	教育政策課主任指導主事	小島 丈晴（会議録作成）
〃	高等学校課指導主事	石丸 右京（会議録作成）

【開会】

伊藤教育長	この協議会につきまして、本日の議事録署名人は八田委員、よろしくお願いいたします。
八田委員	はい。
伊藤教育長	冒頭に本日の教育委員会協議会についてのご説明をさせていただきます。本日のこの教育委員会協議会は本年度で５回目になっております。通算では昨年度からこの協議会を始めておりまして、15 回目の協議会となっております。昨年度１月には地域からの意見聴取として、四万十町での協議会を開催しまして、ご意見をお伺いいたしました。３月には四万十町内の２校、窪川高校と四万十高校の学校の在り方について協議をいただきました。今年度に入り、４月の第１回協議会では、四万十町内の２校につきまして、検討案を３案とさせていただきました。５月に引き続き、両校の在り方について協議を行ったところでございます。 今日 13 日の会と、連休明けの 17 日の会で、四万十町の２校の関係者からご意

	見をお聞きすることになっています。先日、安芸市におきまして安芸高校と安芸桜ケ丘高校の協議をさせていただきました際には、２校が近い場所にございますので、１日で開催させていただきましたけれども、今回、距離がございますので、本日と 17 日、この窪川とそれから大正の方で開催させていただいて、それぞれ関係者からご意見をお伺いするということにしております。 　この二つの会議を通しまして、３案の中から一定の方向性をご協議いただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【議題】

（１）事務局説明

伊藤教育長	それでは、議題の県立高等学校再編振興計画「後期実施計画」における高等学校の在り方」について、高等学校課から説明をお願いします。
山岡企画監	高等学校課企画監の山岡です。資料１ページをご覧ください。「後期実施計画」の策定に向けて協議してきたこれまでの教育委員会協議会での意見の概要です。今年１月に地域会を行い、出されたご意見は参考資料４の右から二つ目の欄に掲載しています。あとでまた、その点についてはご説明したいと思います。 　平成 26 年 10 月に策定した「県立高等学校再編振興計画」では、本校の最低規模を１学年２学級以上としていますが、窪川高校、四万十高校などの中山間地域の学校は地域の学びの機会を保証するために、特例として１学年１学級 20 人以上としています。２の平成 30 年２月 13 日の全体会ではその点を議論しました。原則１学年２学級以上、特例として１学年１学級 20 人以上という最低規模の基準は尊重すべきではあるが、数字だけに捉われることなく検討すべきとされました。 　３の平成 30 年３月の全体会では、各学校の在り方の方向性を協議しました。そこでは、中山間地域の厳しい条件があり、生徒数の確保につながっていない、教育格差が生じない方策を考えないといけない、あるいは四万十町からは熱心な提案もあり、地域と一体となって振興策を考える必要がある、町の運営もあるがそれがいつまでということも検討する必要がある、生徒数の減少の中高校教育の質の問題、保護者の経済負担、そして県の地域振興策や高校の役割なども踏まえ検討する必要がある、あるいは生徒確保のために中高一体化も検討する必要があり、その地域の中学校が力を入れているクラブ活動とのつながりを深め、また ICT を活用して切磋琢磨できる学習環境を整える、といった意見がございました。 　４の平成 30 年４月 23 日の全体会等を経て、７の平成 30 年５月 23 日の定例教育委員会において、生徒数の減少を踏まえ、窪川高校と四万十高校の学校の在り方について、三つの案が「中間とりまとめ」に盛り込まれました。三つの案をご説明いたしますので、５ページの資料２をご覧ください。 　まず、案３についてご説明します。検討材料として、窪川高校と四万十高校の入学者数の実績と将来推計を載せています。平成 30 年度入学生は窪川高校が 25 人、四万十高校が 18 人でありますが、平成 38 年度は窪川高校が 29 人であり、40 人を下回る見込み、四万十高校が 12 人であり、20 人を下回る見込みです。このように１校としての規模が小さく、多様な学習ニーズや社会性の育成、部活動などの点で、このままでは高校教育の質を確保することが難しい状況にあります。こうした観点から、活力ある学校づくりを進めるため両校を統合し、どちら

	かの校地に一本化する案が案３でございます。案３は、右の表にあるように、一定の生徒数を有して、活力ある教育活動が展開できる、高校教育の質が一定担保されるというメリットがある一方、地元で学べる場所がなくなる、人口流出に拍車がかかるといったデメリットが考えられます。また、地理的な状況、経済的負担、交通機関の整備が十分でないといった実態から、自宅からの通学が困難になる生徒への対応が必要となるといった課題もあります。 　１月の地域会では、窪川高校と四万十高校についてご意見をいただきました。参考資料４の右から二つ目の地域会でのご意見の欄をご覧ください。窪川高校の丸の五つ目の後段では、育つ環境で教育格差が生じないよう、中山間の地域の学びの場の確保をお願いしたい、あるいは四万十高校の丸の九つ目では、大正、十和の山間地域では、さらに 30、40 分と時間がかかる集落があり、そこから通学している生徒がいるといった意見がありました。資料２にお戻りください。高等学校の教育の質の確保に重点を置いた場合には、案３のように統合し校地を一本化するという考え方になりますけれども、地域会でのご意見、そして中山間地域から高等学校がなくなった場合の影響の大きさを考慮した案が案１や案２です。 　次に案２について、ご説明します。案２は統合するけれども、窪川高校の校舎と四万十高校の校舎の両方とも引き続き活用するものです。いわゆるキャンパス制と言われるもので、両校の校舎を引き続き利用するものです。キャンパス校は参考資料３でのちほど説明しますけれども、複数のキャンパス、校舎を持つ一つの学校のことです。案２は、統合したうえで両方の校舎を利用するものですので、表の右にありますように、地域に学べる場がある、地域に活力が出る、学校を拠点とした移住促進策や地域活性化策を展開できる、一定の生徒数がいるので活力ある学校行事や部活動ができるといったメリットがあります。その一方で、キャンパス間の移動時間がかかる、移動手段の確保が必要になってくる、合同行事ができる反面、それぞれのキャンパスの独自性が弱くなる、といったデメリットも考えられます。合同の行事を行う場合には、一定活力ある教育活動を展開できますが、通常の授業を行う場合は小規模なキャンパスに分散するので、高校教育の質の確保や活力ある教育活動をどう担保していくのかが課題となってきます。 　最後に案１について、ご説明します。案１は両校ともに現在のまま、本校として存続しようとする案です。地域に学校が残る。地域連携により、地域活性化が図られる。移住促進の施策を展開するうえで、学校の存在は大きいといったメリットがあります。その一方で、生徒数の減少により、学校行事や部活動の面で活力が失われるのではないかといったデメリットも考えられます。生徒数がさらに減少すれば、選択科目が開設できない可能性もあるといった課題もあります。 　資料２の上の表の上に記載しているとおり、２校で存続するという案１になった場合は、今後、窪川高校と四万十高校のそれぞれで活性化策を考えていく必要があります。生徒数が少ない中でどう社会性を育成していくのか。生徒数を確保する方策として、どうしていくのか。学級数や学科等の見直しも含めて、今まで以上に効果的な方策を検討していく必要があります。 　統合するという案２または案３となった場合、統合校の活性化策を検討していく必要があります。学科編成や学級数、学科や専攻をどうするのか、部活動の魅力化、市町村立中学校との連携をどうするのか検討していく必要があります。 　案１、案２、案３のいずれに決まっても、それで議論が終わりではなく、各校の活性化策、あるいは統合校の活性化策を検討していく作業が求められます。案１と案２は、表の右を見ていただくとお分かりのとおり、メリットの三つが共通

	し似た部分があり、どこが違うのかとよく聞かれます。違いの一つは部活動でございます。３ページの参考資料３を、キャンパス制の説明のところですね、９ページのキャンパス校についてというところに、キャンパス制のイメージの（２）のカをご覧ください。野球や一部の競技は除きますけれども、キャンパス校は一つの学校なので、キャンパス同士の合同練習の実績があれば、一つのチームとして大会に出場し、勝ち上がればブロック大会や全国大会に出場できるという点です。ただ、無条件に認められるわけではなく、学校全体として一体的な教育活動をしていること、あるいは日常的な合同練習の実態があることを申請して、一体であると判断された場合には一つのチームで出場可ということのようです。 　違いの二つ目は、案２のキャンパス制も統合であるので、学校名や校歌、校章、制服なども基本的に変わります。新たな学校名を考えなければなりませんし、校歌、校章、制服を検討する必要もあります。校長先生も１人となります。 　また、窪川高校と四万十高校の間の距離は 20 キロメートル以上あります。時間にして片道約 30 分、往復約１時間であります。キャンパス制の場合、両キャンパスの時間や距離を考えると、どれだけ頻繁に部活動の合同練習、あるいは合同の授業ができるのかという問題もあります。部活動の合同練習も現実的には、平日はなかなか難しいのではないかと考えられまして、どちらかに限られるのではないか。合同の授業もそれほど多くないとも考えられます。部活動で一つのチームで出場するためには、学校全体としての一体的な教育活動、そして日常的な合同練習の実態があることが認められることが必要ですので、運用の面にも関わってきますけれども、両校の時間や距離を踏まえて全体としての一体的な教育活動、日常的な合同練習がどこまでできるのかも検討課題となってきます。 　このように案１～案３までは、それぞれメリット、デメリットがあります。地域の実情や学校の特色、市町村による支援の実態なども踏まえて、両校にとってより良い選択をしていく必要があるというふうに考えています。 　教育委員会協議会での議論に戻りたいと思います。２ページをご覧ください。４の平成 30 年４月の全体会での意見は、案１の存続は数年後に入学者が１桁になる推計であり、慎重な検討が必要。案２のキャンパス制は振興策の検討が必要。案３の１校への統合は時期尚早。あるいは子どもたちのメリットを示して、案１か案２で地域の方と協議を進める。あるいはキャンパス間の交流やカリキュラム、移動手段などを勉強したい。あるいは小中高連携を見据えて、何らかの形で地域に学校を残したい。あるいは現状では両校の維持は難しく、いずれにしても移動が必要であれば、統合もやむを得ないのではないかといった意見がございました。 　５の平成 30 年５月の全体会では、案１については生徒数の減り方を見ると厳しい、問題の先送りではないか、子どもたちにデメリットが大きい、といった意見がある一方、キャンパス制が実現可能なのかと思うので、案１と案２で検討したいという意見もありました。中山間地域の活性化の取組で、何らかの形で高校の機能を残す必要があり、案２のキャンパス制を中心に検討していく必要があるという意見や、その場合もキャンパス間の移動において生徒に危険がないよう、バスで安全確保が必要という意見もありました。一方、キャンパス制、キャンパス校として移動手段を確保するのであれば、案３で統合したうえで、その交通手段を確保した方がメリットがあるのではないかという意見もございました。 　こうした協議を経て、６の平成 30 年５月 18 日の全体会では、３ページの点線枠囲みにありますように、両校を統合する案、両校を統合し、キャンパス制とし

	て両校の校地を利用する案、両校を統合し、どちらかの校地に一本化する案の三つの案を中間とりまとめに盛り込むことにいたしました。 　続きまして、参考資料１をご覧ください。両校の生徒数の推移です。先ほど、資料２でご説明しましたが、平成 30 年度入学生は窪川高校は 25 人、四万十高校は 18 人。平成 38 年度の推計が窪川高校が 29 人、四万十高校が 12 人となっています。全校生徒は平成 30 年度は窪川高校が 90 人、四万十高校が 50 人。平成 38 年度の推計は窪川高校が 82 人、四万十高校が 29 人となっています。 　次に参考資料２をご覧ください。高吾地域の中学校卒業者数の推移です。平成 30 年３月の四万十町の卒業者数は、中学校卒業者数は 112 人でした。平成 31 年３月は 148 人と増加しますけれども、その後の７年間は平均 109 人となります。 　参考資料３をご覧ください。キャンパス校とは、上にも書いていますけれども、複数のキャンパスを持つ一つの学校のことです。キャンパス制には２種類あり、本校分校型とキャンパス校型があります。本校分校型はそこの図にもありますように、本校、分校として独立性はあるが、一つの学校です。キャンパス校型は対等な関係にある複数のキャンパスを持つ一つの学校です。案２としてお示ししたのは、ここで言うキャンパス校型の方です。キャンパス校の場合、イにあるように、キャンパス制も統合の一つのですので、校名は〇〇高等学校で統一され、各キャンパスは〇〇高等学校□□キャンパスとなります。またその下のウにあるように、統合ですので、校歌、校章、制服も基本的には同じものとなります。エにありますように、授業は原則としてそれぞれのキャンパスで行います。教員が移動する場合や、生徒が移動する場合があります。オの学校行事や式典は原則として合同で行います。カの部活動は、先ほど説明したとおりでございます。一つのチームとして出場するためには、学校全体としての一体的な教育活動と日常的な合同練習の実態が必要となってきます。続きまして 10 ページをご覧ください。キャンパス校の具体例を記載しています。他県では地域に学校を残す方法としてキャンパス制を導入しています。先進例のキャンパス間の距離は 10 キロ、７キロ、１キロ、２キロとなっています。移動方法はバス会社に県費で委託する例が多数あります。また、校長先生は１名で校舎間を行き来する例が多いようです。 　11 ページをご覧ください。一番右の欄に「後期実施計画」における学校の在り方の方向性を記載しています。存続、キャンパス制での統合、校地一本化の統合いずれになっても、中山間地域にある学校として引き続き活性化策、振興策を真剣に考えていく必要があります。 　12 ページをご覧ください。平成 29 年度に 10 回、平成 30 年度に入りまして４回にわたって教育委員会協議会を開催してきており、５月末に中間とりまとめを決定、公表しました。統合を含めた検討校として学校関係者等を招いて、学校の在り方について協議する場が本日の会です。このあと、９月に教育委員会協議会の全体会を開催するとともに、定例教育委員会で最終とりまとめパブコメ案を決定する予定です。パブリックコメントを実施して、年内には「後期実施計画」を策定したいと考えています。説明は以上でございます。
伊藤教育長	それでは、ただ今の事務局の説明につきまして、ご質問、ご意見がありましたらお願いします。よろしいですか。
各委員	（なし）

（２）学校関係者からの意見聴取

伊藤教育長	そうしましたら、次に学校関係者の皆様方からご意見を賜りたいと思います。 はじめに、窪川高等学校同窓会の牧野会長様からご意見をいただきたいと思いますので、どうかよろしくお願いいたします。
同窓会会長 牧野氏	窪川高校同窓会長の牧野です。教育委員の皆様には夜遅くこちらまでお出ましいただきましてありがとうございます。どうかよろしくお願いいたします。 窪川高校はご承知のように、76 年の歴史を持っており、私たち同窓生も本校の在り方というのは、私も同窓会の役員をして 15～16 年になりますが、そのころからまず窪川高校の定時制が廃止になった折にも、盛んにその窪川高校の在り方ということについては同窓会も非常に何とか定時制を残したいということで、県の教育委員会へも出向かせていただいたこともありました。 これからの高校の存続についてということでは、毎年開催する同窓会の総会においては、私の方からも同窓会の皆さんには将来どうなっていくか、ぜひとも私たち同窓生としても窪川高校の存続にかけて、ぜひ進路等については皆さんと一緒に協力していきたいということで、毎年、同窓会の課題として皆さんの関心も持っていただいております。 本日、このような議論の場を設けていただきましたが、本当に私たちにとって地元の高校というのは大切な、町のシンボルと言いますか、私たちの田舎にとっては教育というのがすべて中央に流れていくという、学区制が解かれた時点から中央の有名高校へ行くという流れが一気に進んでまいりましたが、私たちにとってこの地域で窪川高校が存続する、またそれも恐らく大正地域でも同じことだと思いますが、町の活性化というよりか、活性としてのシンボルである。これからもシンボルであるということに間違いはないと思っております。そういう意味では、ぜひとも両校が存続させていただきたいというのが、まず強い希望でございます。３案というのはまず有り得ないと思っております。 学校側としても、また四万十町の方も、生徒への努力はしていただきまして、私も開かれた学校づくりや教育振興会等に関わっておりまして、窪川高校の非常な努力、ICT を使ったり、梼原とかほかの中山間地域の四万十高校とか、中山間地域の高校と連携を取りながら合宿をしたり、そして教育への非常に情熱を語っていただいていること。また、昨年度から四万十町の公設町営塾ができまして、そこにおいて生徒たちが活発になってきたという、目に見えて活性化してきたということで、私たちは、これからの地元の高校というものに明るい希望と言うものを見い出しておりました。今年の１月に高校再編に対するまず第１回の公聴会が開かれたときに、正直言って覚悟はしていましたものの、もうこんなに早い時期に来たのかということで、一つは大きな衝撃でもありました。 ただ、先ほど示していただいたように、大変厳しい現実というものは私たちも認識をしております。そのためには、地元の中学校への呼びかけというのも先生方をはじめ、皆さん強い後押しをしていただいておると思いますし、また四万十町でもこれからあと町長も述べていただけると思いますけど、四万十町にしても地元にやはり人材をこれから先の人材を残していくということでも、大きな意味があると思います。 本当にお恥ずかしい話ですけど、私の２人の娘はここの地元の高校を出ておりません。親として勧めておりましたが、昭和 50 年と 52 年生まれですね。そのときには、少し成績が良かったら先生方が高知の方への学校を勧めたりとか、そう

	いうことがありまして、親の説得がうまくいかなかったことがあります。 ただ、卒業した娘たちが言うのには、やっぱり地元の高校を出ておれば良かったと。なかなか地元の高校を出て、大学を他所の大学へ行っても、地元の高校を出ると、もし地元へ帰ってきた、将来帰って来たときに地元の高校を出た場合には、非常に地域とのつながりが深くて、いろいろと仕事面でも活かされただろうというふうに今、語っております。ところが、町外へ出て同窓生とも滅多に会うこともなく、もう 40 代になっておりますが、少し今になったら後悔するというふうな話をしておりました。 　もっと早く二十数年前にそれが実現できたらというのが、本当に親としても悔いでございますが、私の知っている後輩でもこの窪川高校を出て、高校の推薦で公立大学を出て、そして今、30 代ですが、福祉分野でばりばりとリーダーとして働いていらっしゃる方とか、またこの役場でもそういう重要なところで働いていらっしゃる方もおいです。十分、地元の高校を卒業して、地域のリーダーとして働く力をここで養っていくということでも、ぜひとも高校存続ということで訴えさせていただきたいと思っております。 　どうか、教育委員の皆さんには、慎重に地元の声を十分に聞き取っていただきまして、将来どうなるか、親たちが、また子どもたちが、こんなはずじゃなかったと悔いの残らないように、ぜひ良い方法でいきたい、またお願いをしたいと思っております。どうかよろしくお願いいたします。
伊藤教育長	ありがとうございました。ただいまの牧野会長からご発言いただきましたことに対しまして、ご質問とかご意見とかございましたらお願いしたいと思います。
八田委員	私も何とか存続する方向で考えていきたいんですけれども、最大の問題はおっしゃったように、四万十町の子が窪川高校に進学しないというのが問題で、これを解決する以外方法はなくて、それをどうしたらいいのかがどうしても分からなくて。私の個人的なイメージは、いろいろ努力もしたし振興もいろいろやってきたけども、今までの窪川高校を引きずり過ぎてて、そのイメージは、中学生にとって必ずしも魅力的なものではなかったのかなという気がしていて、存続するんだけど、例えばこの際、一度やめて新しい高校をつくるんだぐらいの刷新をしないと、中学生の目にはもう映らないのかなというふうに少し思っていて、四万十町の子どもたちはどんな高校だったら行ってくれるのかな、これは非常に難しい問題なんですけど、何かもし思うところがあればお願いしたいです。
牧野会長	過去にも同窓会で議論したことがありまして、思い切って教育内容を変えてみるとか、ただ、教育内容をどう変えていくかということで、議論で揉めたことがあります。ただ、一つは進学とか進学率の問題で、ここで充実した教育ができるということを十分ここで自分の希望した大学なりに入ることができるとか、入学できるとか、あるいは子どもの将来にとって丁寧な進学指導、それは多分、中学校からだと思うんですね。中学の場合に子どもたちがいろんなイメージを、部活動のこともあると思うんです。部活動の場合は本当に生徒数が少ないと、思う存分部活動ができないという、そこは例えば、私の親戚の子はたった１人で野球部を頑張っておりますけど、そういう本当に涙ぐましい努力をしております。 　そういう環境というか、部活動が活き活きできるようにどうしていくか。また、教育内容で魅力あるための、それはもう何回、私たちの同窓生でもそんな議論を

	したことがありましたが、今、公設塾という町の大きな後押しもあって、子どもたちの未来というものが狭いこの四万十町の空間の中で、もう少し外への目というものが開かれた場合、もっといろんな多様性を子どもたちが求めて、それに応えていくような内容というのを、先生方もこれからきっとやっていただけるんではないかと思っております。
中橋委員	先ほど、お話の中で第３案は有り得ないというお話があったかと思いますけれども、今回、第１案から第３案まで示されておるわけですけれども、今の学校の形が残ることを望まれているのか、それとも何らかの形で地域に学校が残るということでも、それは同窓会として、一定の目的は達成されると考えられておられます。その辺りはどうなんでしょうか。
牧野会長	同窓会として、本当に望むところは第１案ですが、ただ何とも言えないとこです。同窓会としては、地元の高校がより良い形、今、例えば発展的になるということがやはり前提になると思います。そのまま消極的ではないということで。
伊藤教育長	ほか、ございませんか。それでは牧野会長さんどうもありがとうございました。 次に、窪川高等学校教育振興会の谷脇副会長様よりご意見をお伺いしたいと思いますが、よろしくお願いいたします。
振興会 副会長 谷脇氏	窪川高校教育振興会副会長の谷脇と申します。よろしくお願いします。副会長でありますが、会長は先ほどの同窓会会長の牧野さんでございますので、私の方で代わりに務めさせていただきます。まずは、ここの高校再編によることで、県の教育委員会に来ていただきまして、このような場を設けていただいたこと誠にありがとうございます。教育再編について、ひと言申し上げたいと思います。 今日は窪川高校でやっているわけなんですが、四万十高校も別の日に会を開催するということで、それぞれ生徒数とか地域の事情、いろいろ違ったところもあろうかと思いますが、四万十町で議論をしていただきまして、皆さんが納得のいくような結果に、ぜひともしていただきたいと思うところでございます。 今回は学校の在り方というところで、三つの案を示してもらっているところですが、１案はそのまま、３案は統合、２案は、キャンパスという三つの案を示させてもらっていますが、牧野同窓会長も言われたように、私としましても３案目の統合というところはできることなら避けていただきたい。今日の資料にもありましたが、具体的な生徒数のこととか、数字的なところは正直、かなり厳しい数字が見えておりますので、生徒もおらんのに現状維持でなかなか厳しいんじゃないかという意見も当然、承知ではありますが、私、我々としまして、また地域にとりましてもできることなら３案でない方法を取っていただきたいと思います。 そのために今、生徒の確保とかいろいろ、今までも当然やってきておりますし、先ほどの質問にもありましたが、なかなかいろいろやってきたけれども、どうなのというところはあります。ありますが、でも、今回そのままそういった事情により２校統合するというのはちょっと厳しいかなと、地域にとりまして。私自身、保護者のときに小学校の統合を経験しました。やはり生徒数が少ないというところもありましたが、そういったところで統合しましたが、やはり地域にとりまして学校が一つなくなるというのは、やはり本当寂しいところがあります。寂しいだけで残すというところではございませんが、地域の活性化とか、特に今、本町

	におきましては、移住促進とかいうところで随分、学校の在り方というものが重要性があるのではないかと思います。そういった面から含めましても、できるなら統合でない方策を取っていただきたい。 　そしたら１案か２案かというところにはなるかとも思いますが、生徒数の問題があります。いろいろありますが、やはり確保するためにはどうするべきか、今までも取り組んではきましたが、それ以上にもっと具体的な案を考えながら生徒数の確保に努めていけば、明るいところがあるんではないかと思うところです。 　町の方としてもいろいろな施策を取っていただいております。今学校、地域、町、その三つが絡みと言いますか、上手く絡んで高校の活性化に向けた形でいっているのではないかと。ここ２～３年、がらっと変わるような私は気がします。そんな中でいろんな方策を取りながら、両校が頑張って活性化していける学校をつくっていきたいと思います。ということで、そういった方向での結論と言いますか、方策で進めていっていただきたいかなと思うところです。以上です。
伊藤教育長	ありがとうございました。ただ今の谷脇副会長様からのご発言に関しまして、質問とかご意見ございましたらお願いしたいと思います。 　よろしいですか。谷脇副会長様、ありがとうございました。 　次に窪川高等学校の保護者の代表、川上様からご意見を伺いたいと思います。どうかよろしくお願いいたします。
保護者代表 川上氏	窪川高等学校 PTA 会長を務めます川上と申します。本日はよろしくお願いいたします。はじめに、これらの時間をいただけること、感謝いたします。先ほど来、お二人、学校関係者ということで同窓会、それから教育振興会の方からお話がありました。PTA 会長としまして、窪川高校の保護者を代表する立場として、ここでお話をさせていただきたいと思います。 　すでに案は示されておりますが、私どもの希望としては、やはり両校の存続という形を強く願うものです。今まで築いてきました歴史や文化がそれぞれ両校にありますし、それぞれが地元の高等学校として、特色ある高等学校として地域の核となっている部分がありますので、そこはやはりまず残すということを前提には考えていただけたらと思います。 　もちろん、厳しい状況があるのは重々承知でありますが、今後も私たちの課題としては高校の魅力を PR していくこと、それから当然、進学先として選んでいただける高校にますますなるような努力は必要ということは考えております。窪川高校に関して言えば、窪川中学校以外からも来ていただくと。なるべくたくさんの方に入っていただくという努力は今後も絶対に必要とは思いますが、その中で多様性、窪川だけではなくて、ほかの地からも来ていただくことによっての多様性ということもこれから必要と思っております。 　また、現在も町から多大な支援等はいただいております。両校ともそうなんですが、その中で学校単位でもさまざまないろんな活動を行っておりまして、新聞それからケーブルテレビ等でも好意的に取り上げていただきまして、地域からも評価をいただいているところです。中山間地の学校でありますので、就職を希望する者も一定割合おります。その中からやはり地元を希望する方も増えていると聞いております。今後の地元の活性化、地域の活性化ということ、残っていただくということを考えると、数だけの理論ではなくて、そこにあることということをまずベースに考えていただけたらなと思います。

	私個人のことを申しますと、子どもが３人おります。上の子も卒業生、今２人在校生です。親としては、地元の学校に行ってもらうのは、経済的に非常に助かります。ここになければ何らかの手段で下宿なり、何なりをさせて通わなければならないということですので、そういった意味でも非常に助かっていますし、そのうえで、希望する進路が叶えば親としては言うことはないと思います。 先ほど来、案の話が出ましたが、先ほどの二者と同様ですが、３案の中の第３案の統合の一本化という案には明確に反対します。理由は、今、窪川が 90 人、四万十が 50 人ということですが、足し算の理論で１＋１＝２ということにはならないと考えております。両校を単純に足せば 140～150 となるんですけれども、距離的な要因とか、地域要因を考えますと１＋１＝１以下になると思います。なので、やはり単純にここでも数だけで考えるのではなくて、そういった部分も丁寧に拾い上げていただけたらなという気がいたします。 私自身は現在の当事者でありますので、本日ここで意見を述べさせていただいておりますが、もし今後、丁寧な議論をということであれば、実際にこの問題が確定をして、１案であれば現状通りということになるんでしょうが、何らかの動きがあるのであれば、実際に影響を受けるのは今の在校生よりは、むしろ今の中学生とか小学生だと思います。そういった世代の方々の保護者とか地域の方々のご意見も拾っていただけたらなというふうに思います。以上でございます。
伊藤教育長	ありがとうございました。今の川上さんのご意見に関しまして何かご質問、ご意見等ございましたらお願いをしたいと思います。皆さん、よろしいですか。
平田委員	窪川高校にかける思いをお話をいただきまして、また、四万十高校も含めましてお話いただきましてありがとうございました。会長さんにお聞きしたいのは、生徒減少している中で、やはり部活動の問題であるとか出ました。そういう中で、教育の質というのを確保する点で、会長さんとしてはどんなにお考えされているのか、お話を聞きたいと思います。
川上会長	おっしゃるとおり、人数が余りに少なくなると教育の質を担保するのが難しくなるというご意見はあると思います。また、保護者の中にも私が今、言った意見、必ずしもこれだけではなくて、例えば多人数の学校で学ばせたいとかいうご意見もあろうかと思います。ただ、一定の規模は必要ですから、今後も努力は必要という認識はしている中で、当然、窪川高校は小さい学校ではありますが、小さいから確かに部活動の面とかでデメリットだったり不利な部分はありますが、そこだけを捉えるのではなくて、先生と生徒の、地域の関係が近かったりとか、そういうメリットも非常にございます。単純計算ですけど、生徒が少なければ割合に占める先生の数が多いわけですから、逆に取るというわけではないんですけれども、きめ細かく見ていただけるようなメリットもあります。 少ない方が良いというわけではないんですが、一定の規模を維持する、増やすという努力は絶対必要ですけれども、それだけを逆にデメリットとされるのはちょっといかがなものかなという気はします。間違いなくデメリットである部分も分かってはいますが、そういう考えです。
伊藤教育長	ほかにございますでしょうか。よろしいですか。それでは、川上さん、ありがとうございました。

（３）四万十町からの意見聴取

伊藤教育長	そうしましたら、続きまして四万十町からの意見をお伺いします。中尾町長様からご意見をお伺いしたいと思いますが、どうかよろしくお願いいたします。
中尾 四万十町長	四万十町長の中尾でございます。今日は伊藤教育長をはじめ、教育委員の皆さん方、また教育に携わる皆様方には高等学校はもとより、小中学校課程の義務教育課程を見ても本当に尽力いただいておりますことを、この場を借り、心より感謝を申し上げたいと思います。 今日は、町の考え方というところを申し上げる機会でございますけれども、先ほど来、同窓会長をはじめ、PTA 会長、そして副会長も含めまして申し上げた内容、そして先だっての会議の内容も見させていただきました。 私の立ち位置としては、やはり１番今思うのが、この４年間、この任に当たって思うのが、やはりうちの窪川、四万十高校に限らず、地域の高等学校の在り方というのが非常にまず１番気になるのが、選挙権を有した子どもたちがいるのにも関わらず、地域課題がなかなか共有できてない。またそういうような探究的な学習もできてない中での投票というのが非常に今、自分は不安に思っております。今後、例えばこれからだんだんに高知市内高校に進学をして、それとはまさに地域との関わりが少ない中で、公民権を得て投票をするということは、本当にできるのかなというような不安もあります。 そういった意味で、今、先ほど来、委員さん方からいわば発表いただきました、「じゆうく。」という、平成 28 年 11 月に開設をして、これはこどもみらい塾ということで、まずは高等学校からというような取組もしております。ただ、なぜ高等学校かと言うと、それぞれ四万十高校、窪川高校の私が就任したときの振興会の皆さん方のご意見を聞くと、やはりいろいろな環境、四万十高校であれば通学助成であったり、寄宿舎の支援であったり、そういったことが主なものでございました。 窪川学校においては、まだそこまでの具体なことがありませんでしたが、やはり町としては地域の最終学校として窪川高等学校、四万十高等学校において、教育できる環境はやはりしっかりつくっていこうということで、人材育成推進センターを設けてやってきたところが、今の状況に至っています。 結果としてやはり、50 数人の中でやってますけども、やはりこれから先ほど来、話があったように、私の場合、今日の段階でどうのこうのという考え方は持っておりませんが、できれば先ほどの、例えば地元での探究学習ができることで言えば、学習課題がしっかりピックアップできて、子どもが次に進むときに妨げない勉強ができる環境というのが地域校の１番良い、言えば良い環境にある学校だというふうに思っています、逆に捉えれば。 しかし、クラブ活動であったり、私も親ですけれども、ちょうど子どももすべてこちらで出してないです。というのは、やはり子どもに選ばせましたので、非常に私は高等学校はここですので、そういった意味では非常に親近感がありますけれども、やはり本当に選ぶ段階で子どもたちがその学校のことを良く分かっているのか。先ほど委員さんに伺ったように、選んでもらえる学校なのかということをやはり１番中心に考えるべきだと思います。そういった意味では、学習環境の当然、学校にお任せしてその環境整備は行政としてやっていこうということで、いろんな整備を協議しながらやってますけども、やはり地域の学校の良さを

	いかにしっかりと充実して、この私が思うのにやっぱり平成 33 年ごろまでには窪川高等学校、四万十高等学校のいわば子どもたち、学生が実績をつくっていただいて、後輩がそこを評価していただいて、進学増につながるようなやっぱり取り組みができないと、なかなか厳しいだろうなという推測はしております。 選んでもらえる学校づくりというのは、やはりこの両校においては可能性はありますので、それはこれからも引き続いて研究もし、そして振興会の要望をしっかり精査をさせていただきながら、ともに本当に子どもたちの学習環境が充実できるような取り組みを、今後していきたいと考えておるところです。 結果だけ申し上げますと、やはり高等学校の高校生が町中を歩いて、私も高校、高等学校の高校生と座談会をします。去年は私も選挙でございましたので、18 歳の３年生とはやりませんでした。しかし、これから今年もやっぱりそういった地域課題を私なりに彼らに伝えて、彼らに探究的な、いわば志を持っていただいて、そういう意味では両校の存続と１番良い環境にあると思いますが、いかんせん、子どもたちに聞くと、やはりクラブがなかなかできないとかいうことが現実的な問題です。 加えて、これは少し笑い話になりますけれども、四万十高校に行ったらコンビニがないとか、いろいろなご意見もあって、やはりそういった子どもたちのことを考えたときに、そういう希望とか、自分が求めるものがあるんだろうと思います。ですから、ただ学習環境だけとか、そしてクラブだけではなくて、やはりそれと思い、例えば窪川駅から須崎高校へ通うにやはり列車、汽車通で 40 分ぐらいかかります。しかし、それも一つの学校生活の中での良い思い出になったり、友達とのコミュニケーションになったり、そういったことで最終的には子どもたちの評価があるんだろうというふうに思います。私としたら地域の学校が残ればベターでございますので、そういった努力はしていきたいと思います。 県教委におかれまして、まさに今からの高等学校の在り方の中で、その位置付け、言えば中山間地の高校の位置付けという意味では、県教委の中でもご議論いただいて、私どもは精一杯、そういった方向性の中で子どもたちを応援する。そして学校の、いわば運営を行政としては応援をするという考え方で臨みたいと思いますので、今日の中で１、２、３、どれがいいのかということについては、ちょっと私自身もまだ勉強不足でございますので、そこはお答えできませんけれども、今、それぞれの同窓会の会長であったり、皆様方のご意見というのは重々に私も今日、ここで聞かせていただきましたので、今後私なりの責任として考えていきたいというふうに思います。以上です。
伊藤教育長	ありがとうございました。四万十町長様のご発言に関しまして、ご質問、ご意見等ございましたらお願いしたいと思います。
平田委員	私、いくつかの場でもお話をしたことがありますけど、本当に県立学校が市町村の絶大なる支援を受けて、今日、学校運営しているということを今回、このブロックごとで会を持ったときにお話をいただきまして、本当に地元の学校として必要だから市町村がまた支援をしていくという意味合いがよく分かります。 それで資料を見まして、今、町長さんが地域の教育の在り方とか教育環境の整備だとか、地域で勉強のできる学校づくりに取り組んでいるというお話を聞きまして、大変心強く思ったわけでございます。平成 33 年度には高校として進学増にもつながるような、というお話もあったと思いますけど、現在、四万十町とし

	て優秀な人材を育成して、これから将来、四万十町の活性化につながる人材育成のために、いろいろ公費を抽出して、子どもの支援をしているだろうと思いました。そのいわゆる通学支援だとか、いろんな公設塾ということで、平成 28 年ぐらいから開設しているという、高知県でも大変古い方で歴史のある公設塾だと思うんですけど、町長さんから見て、こうした町の支援を四万十町の子どもさんにどういうふうな形で活かされて、将来、高校の存続も含めて、ちょっと全体的な町の支援が、地域の児童生徒にどういうふうに影響しているのかなということをお聞かせいただけましたらと思います。
中尾町長	まずは学びの機会を保証するという立ち位置からこの事業をやっています。というのは、我が町においても、農業者、林業者、そういったいわばサラリーマン層じゃなくて、日常的に地域の産業に携わって、なかなか年においては所得も一定確保できない、そういったやはり家庭的な問題もあると思います。高知でいけば下宿は学費全て含めて 11 万ぐらいあれば、他の学校で通学できる環境はあると思いますが、なかなかそのお金を捻出できにくい家庭もあると思います。いける方は結構ですけども、やはりそういったなかなか経済に問題が、どうしても課題があるという方においては、地域で学習をできる環境をつくっていこうというのが基本的な考え方です。 そういう意味で、かなりの今、お金がかかっていますけども、自由に学べる、そして自由に自分の探究学習ができる、学力も付くというような環境をまずつくろうと。しかし、いずれにしても志が大事でございますので、やはり小学校課程から中学校、そして高等学校に至るまでの中で、やはり地域との密接なコミュニティーの中で育った子どもたちが、やはりそういったところに意識を持っていただいて、それから先ほど来、申し上げましたように平成 33 年か平成 34 年、今、１年生が一定大学入試をして、次のステップに上がったときに、ここでもできるんじゃないのというような、やはり意識の改革、醸成と言いますか、そういったものにつなげていきたいというのが正直なところです。やはり実績を積んでいくということが何の世界でも必要ですので、窪川高校は今までも進学できてないということは全くないですが、もっともっと自由に志があれば、本当に国公立、先ほど言われたように狙える、十分そういったいわば学力が付く、そしてコミュニケーションもしっかり取れて研究発表もできる。そういった人材をつくっていきたいと考えております。これが一定、今回の定例会でも出ましたけども、費用対効果の問題もありますので、余り、ただいたずらに長くということではないですけれども、やはり平成 32 年ごろには１度、整理をしてその辺の保護者の意見も聞きながら、次のステップへ進んでいきたいと考えております。 それから、我々、学校も含めて、この町で生まれた子どもが、この町でしっかりと勉強できる環境というのは、ただ高等学校だけに限らず、今、小学校、中学校もそうですけども、今の学力テストの問題もそうですね。意欲があれば僕は学べるというふうに思いますし、学べれば学力は付くと思います。これクラブ等でもすべてそうですけども、そういった町の課題というのは勉強しようという意欲、そしてここで暮らしていこうという意欲、それでさらに上級学校に進んで、こういうことをやってみたいという意欲を付けるという中で、町も応援していますよとかいう、それから保護者に対してもこういった町民皆の支援を、税金とかそういうものですから、やはり税金を投じて皆に認めてもらった、こういった政策ですよということもしっかりおつなぎをしてやっていければと思います。結果

	として、私が思うに今の１年生、高等学校１年生が大学入試をするころに、一定の評価をいただけるような取組ができればと考えています。 　ただ、こうやってずっと今日ここに来ておる住民の皆さん方もおりますけれども、こういった情報はなかなか出てないです。ですから今月から、８月号から特集記事を組んで、こういった人口の問題であったりとか、地域の課題であったりとか、記事を書いて住民に伝えていく。さらには、懇談会も必要だと思います。今まで２回、昨年は小学校校区を対象にした懇談会を 12 カ所で保護者と先生方に集まっていただいて、課題を共有しました。ただ、参加人数が少ないですので、そういったことがだんだんに広がらないと、こういった事業も実のあるものにならないということで、今、委員の皆さん方からご指摘があったように、結果は皆に評価にしていただけるような、いわば町づくりの一つの担い手となっていただけるような高等学校の在り方というのがベターだと思いますので、そういった取り組みの中で思い、狙いを持ってやっていきたいと思います。 　この前農林水産省に要望行って、窪川高等学校に農業をしたいという者が２人ぐらいおります。ここでやってみたいと。そういった地域の産業をしっかり自分の目で捉えて、それを学習してやっていくことが、この四万十町の次を担う、時代を担う担い手、人材になり得ると思いますので、そう言った意味では、限られた財源の中でしっかり人材育成には当てていきたいとは考えております。 　今、議会もそういったところでは一定理解がありますので、この２、３年の間に、しっかりと投資をして評価をいただけるような取組にしていきたいと考えております。お答えになっていないかもしれませんけれども、議会のご理解もいただいて、予算的にはできておるところです。
伊藤教育長	ほかに構いませんでしょうか。ありがとうございました。

（４）会場からの意見聴取

伊藤教育長	それでは、ここで会場にお越しの皆様方から意見をお伺いしたいと思います。すいません、ご意見いただける方につきましては、議事録を取っておりますので、お名前をおっしゃっていただいてから、ご発言をしていただきたいと思います。どうかよろしくお願いいたします。
傍聴者 樫本氏	どなたもなかったので、勇気を振り絞りましてお話をさせていただきます。意見というよりは私の思いというか、私は窪川高校に現在、子どもが通っております樫本と申します。興津保育所というところで所長もしております。自治体の職員としての立場もあります。両方の立場でお話をさせていただきます。 　４月に初めての試みで興津保育所、すごく海の近くなんですけど、そこの子どもたち 17 名と窪川高校の生徒さんとで合同の避難訓練をいたしました。そのときに興津は小学生と中学生とお年寄りと、それからハウスをしている若い方が数人おるようなところですけど、地元に 90 人の高校生が来てくれました。一緒に避難訓練をしてくれたっていうことで地元が活気づいたというか、すごく子どもたちも喜んで一緒に高い避難所まで逃げてくれました。私たちが乳児を乳母車に乗せて坂を上ろうとしたら、年齢的にも 40 代の職員が多いので、はぁはぁぜぇぜぇ言うところを高校生はいとも簡単に上ってくれて、やはり地元にその高校生がいるっていうことの重要性を肌身をもって知らされたというか、高校生がいる

	ってこういうことなんだねっていうことを職員とも話をして、本当にありがたいお話でした。 　それが一つと、それから四万十町には興津とか志和とか、坂を上って窪川高校に行かなければならない片道車で 30 分ぐらいかかるようなところがあるんですけれども、私はその自治体の職員として、普段から住民とは接触することがよくあるんですけど、やっぱり一人親家庭で頑張っているお母さんもおられます。それからお父さんが病気になってお母さんが一生懸命やりゆう方もおられます。事情があって親とは一緒に暮らせなくて、おじいちゃんやおばあちゃんと一緒に暮らしている子どもたちもいます。その子どもたちが高校生になったときに行ける高校が地元にあるっていうのは、すごく大事なことなんじゃないかっていうのを感じています。 　窪川高校があったから私は高校へ行けたとか、自分の力でバイク取って高校へ行けたとかいう、その距離に高校があるっていうのは、そういう弱い立場の子どもさんにすごく良いことなんじゃないかなと思って、そういう子どもさんもいるということを頭に入れておいてもらったら、考える視点がちょっと変わってくるんじゃないかなと思うので、ぜひそういうこともお願いしたいと思います。 　そんなことですけど、すいません、日々、いろいろ小さな子どもとかお父さん、お母さんと話している中でそういう話も出てきますので、ぜひご検討よろしくお願いします。ありがとうございました。
伊藤教育長	どうもありがとうございました。ほかにご意見ございますでしょうか。 　よろしいですか。もし、言い残したっていう方がいらっしゃいましたら、火曜日、私ども大正の方になりますので、そちらに来ていただいても結構ですので、それでは一応、会場の方からはこれで終了させていただきます。

（５）教育委員による協議

伊藤教育長	それでは、教育委員によります協議に移りたいと思いますので、各委員さん、ご意見ある方よろしくお願いいたします。竹島委員さん。
竹島委員	今日はいろいろな意見をありがとうございました。その経済格差が地域格差にならないように、いろんなことを町長、町としてやっていらっしゃると思うんですけれども、四万十高校と窪川高校を独立したものとして考えた場合、キャンパス制とかを敷く場合に、そのいろんな交通手段とかがあると思うんですけど、今日、町長さんもいらっしゃっているので、いろんな経済的なご支援もやっていらっしゃるんですけれども、もし四万十高校の寮とか、そのまた交通費のもう少し格上げとかの面は、これから考えていただくようにはなれるんでしょうか。
中尾町長	はい。ある程度、考えております。今、電車賃とか定期を買っておれば３,000円を超える分については町が支援しています。旅費の場合ですね。寄宿舎も今、地元の方から要望を聞きまして、入寮費の確保もされてくれとかということもあります。ただ、私としたらその場のお答えは細かくしておりませんけれども、やはり本来の学校の魅力をつける教職員以外の部分ですよ、つける方法の中での後押しをするべきだろうと考えています。 　当然、通学助成とかそういったものは地元高校に通わなくてはならないという

	切り口の中では支援をしていくと。しっかり精査をしながらやっていくという方針を持っておりますので、それに加えて、そこに残ってもらえる子どもたちをしっかり定住をしながら、目を向けていただくような取り組みも当然していかなくてはなりませんので、そういったことが総合的に判断をされれば、これからも先ほど来、申し上げましたように支援をしていく覚悟はあります。
木村委員	今日はどうもありがとうございました。お立場上、３案の中で第１案をというお話はよく分かりますし、このキャンパス、第２案のキャンパス制というものは、高知県では今までもやったこともございませんので、皆さん方も何となく理解しづらいというところもあるのかも分かりませんが、現実をしっかり見ると、課題を先送りして次の人に引き継がすというのは、僕はある意味でちょっと無責任じゃないかなっていうふうに思います。それぞれが今のままの形で存続するというのは、地域の皆さん方にとっては、本当に希望されるというのはよく分かるんですけども、果たしてそれがいつまでできるのか。 そういうことを先送りせずに考えていくということが一つ大事じゃないかなと、個人的には思ってますし、この四万十町、窪川のこの立地的条件と言いますか、これは大きな魅力でもあるんですけども、そこに住む子どもたちにとっては、そのそばに学校がないということ、それから、その四万十高校にしても、窪川高校にしても学ぶ場所がなくなるというのは、できる限り避けなければいけない。子どもに学びのチャンスを奪うことは駄目だと考えています。 そういった意味で、今日はその３案の中のどれということではないんですけれども、２案について、ひょっと地域の皆さん方からご意見伺えるのかなと思っていましたけど、やっぱり分かりにくいというところがひょっとしたらあったんじゃないかな。これから。私自身もすっかり消化しているわけではないんで、このキャンパス校の制度にして、もしするんであればどんなことを足さないかんのか。それで通学の問題であったりとか、何がより課題なのかということも含めて、皆さん方にもう少し理解をしていただかないと、少なくとも１案、２案の議論にはなかなかなりにくいのかなというようなことを感じました。
八田委員	私も木村委員と同じ、そのキャンパス制というのは、どうしてもこれは検討はせざるを得ない問題で、検討するための情報を随分、事務局も今回大分、提示していただきました。まだまだちょっと分かりにくいところもたくさんあって、今日の参考資料で言うと、本校分校型というのがあるんだけど、それだと部活動が合同で組めないというデメリットがあるっていうようなことなんで、そうするとキャンパス校型になって、合同で一緒にやっているっていう実績があれば一つのチームにできるということです。 いずれにしてもこの少人数、少人数教育、途中でおっしゃったように少人数教育できめ細かく指導できるっていうことは確かに一つのメリットではあるんだけども、子どもたちが本当にそれを望んでいるかどうかはよく分からなくて、むしろ子どもたちは大勢でいろんなクラブ活動をしたい、切磋琢磨したいっていう方が実は多いのかもしれないなと思います。 そうすると、キャンパス校型で両方合わすことで人数をある程度は確保できる。でも、実際に活動しようとすると、結局、クラブの時間はバスでこっちのキャンパスに行くとなったら、それはキャンパス校にしているメリットがあるのかなっていうところがすごい引っかかるんですね。

	私はキャンパス制、最初に聞いたときには、もちろん本当に両方存続できればもちろんそれが良いんだけれども、それが難しいのでキャンパス制が良いのかなと思ったんだけれども、そうやってクラブ活動のために、しょっちゅうバスで移動するとかということを本当に考え出したときに、校地を統合するのと比べてそんなにメリットがあるのかなというのがすごく今、疑問なんです。ほかにもっとやり方があるのかもしれないけども、まだちょっとそこは勉強不足で、ぜひその辺も少し地域の皆さんで考えてほしいなという点です。 それと、今日は窪川高校の関係の方がほとんどだと思うんですけども、窪川は平成 38 年までそんなに生徒は減らないんですよ。問題は、２、３割しか窪川高校に来てくれないことだけが本当の問題で、これが５割を超えれば全然話は変わってくるんですね。そこに何とか持っていきたくて、残念ながら今、多分、もう負のフィードバックがかかっていて、皆、行かないからやっぱり僕も高知市内に行こうっていう子どもたちもかなりいると思う。あるいはクラブ活動がここではできないから、やっぱり行こうかなって思っている子がいると思うんですね。 本当に四万十町でいろんな努力をしていただいて、支援をしていただいていて、例えば進学率を何とか上げるということで町が支援してやっていただいているんですけれども、それがなかなか子どもたちの目には、行きたい学校になっていないかもしれません。行ける学校がもちろんあってほしいんだけれども、本当にあってほしいのは行きたい学校なんですよ。僕たちここだったら行きたいと。それが正のフィードバックになって、せめて半分以上が窪川高校なり四万十高校に行くってなると、しばらくは問題なく持続するのかなと。十分にいろんな活動ができるのかなと思うんですね。どうしたら良いのか、いやもちろん我々がそこの努力して、どうしたら子どもたちに魅力のある学校にできるかって、これからやっていかなきゃいけないんですけど、やっぱり僕の中で一つ気になるのは、なかなか急に学校のイメージって変わるものではないんで、少し何か思い切って変えるっていうことを、外にアピールするようなことをしなきゃいけないのかなと思っています。 それは例えば、県立をやめるっていうのは、そんなことは言いませんけれど、県立なんだけれどもここは町立だと。町民がつくりたい学校をつくったんだと。そしたら全然違う学校なんだぐらいのことをやって、だからもうこの小学校の人、皆ここへ行こうよというぐらいのことをやって、とにかく５割を超えたら、それはかなり良い方向に行ける。 今、本当に学校の先生方も努力されているし、町の支援もたくさんやってもらっているんだけれども、なかなか今のまま一生懸命やっても、これが順調にいって半数が行くっていうところまで持っていくのは難しくて、そこには何か大きなイベント的な刷新するというようなことがあって、これがもう四万十町の誇る高校なんだと。そういう何か見え方が変わる、ひょっとしたら例えばもう中学生に一緒に提案してもらって、この高校だったら行きたい。その高校をこれから一緒につくるっていう方向に持っていけたらいいなと思っています。 勝手なことを言ってますけど、何とか良い方向へ持っていきたいので、そのための最大のゴールはやっぱり過半数がこの高校に行きたい、行こうっていう学校だと思うんですね。そこにまたいろんな情報をいただければと思います。よろしくお願いします。
竹島委員	牧野さんがおっしゃられたように、子どもさんが、お二人が中学校の先生から

	市内の学校へ行けって言われたって、何かそこら辺のことを考えた場合に、やはりもう少し小学校、中学校との連携が、先生同士も巻き込んでのお話し合いなんかもやっているとは思うんですけれども、やっぱりこういう問題が起こった以上は、もう少し話し合っていただきたいなと思いました。
伊藤教育長	そのほか、ございますか。ありがとうございました。

【閉会】

伊藤教育長	そうしましたら、今日は窪川高校のご意見をお伺いしたということで、これから週明けに四万十高校のご意見をお伺いしまして、二つの両方のご意見をお伺いした上で、またこの１、２、３案についての協議をさせていただこうと思っております。一定、ここで予定しています議事につきましては終わりですけども、事務局から何かございましたら。
山岡企画監	次回、７月 17 日（火）、大正地域、きらら大正で教育委員会協議会を行いますので、よろしくお願いいたします。
伊藤教育長	それでは、以上で本日の教育委員会協議会を終了いたします。皆さん、本当に今日どうもありがとうございました。